洞庭紅（訳）

山岡利一

洞庭紅

洞庭柑は採取された翌年の春になると赤くなる。それを洞庭紅と名づけたのである。洞庭柑の皮は薄くて味はすばらしく、これを他の柑橘類に比べると、韻（すがたなりふり）は及ばないが、成熟最も早く、ことを貯蔵して、翌年の春になると、その色は赤色になる。郷人は、その種は洞庭山より来たので、そのような名をつけたのである。

〔韓彦直・橘譜〕

話はわが明朝の成化年間のことである。蘇州の閶門（蘇州城西北の門、門外に綺楼が多いので）外に、姓は文、名は実、字を若虚という者がいた。生来、考が敏捷で、やればでき、習えばよく理解する。琴・将棋・書画・笛・三味線・歌舞・何れにも略々通じた。幼い頃、或る人が彼に巨万の富を持てると占った。彼も亦自ら才能を恃んで充分家業に励まなかった。「坐して食えば山をも空し」の諺の通り、先祖の遺した千金の財産もだんだんとすりへらした。その後、家産には限りのあることを暁り、他の人が仲買して常に数億の利益をかせいでいるのをみて、自分も何か商売しようと思っていたが、何をしてもうまくいかない。或る日、人が北京で扇子がよく売れるということを聴き、彼は一人の仲間と扇子を仕入れてきた。上等の金面の精巧品はまず贈物をもって有名人の詩画を書いてもらうのだが、沈石田（名は周、字は啓南）や文衡山（名は徵、字は徵明）や祝枝山（名は允明、字は希哲）―（大同家）などちょっと筆を執ってもらうだけで銀子数両となる。中等のものは、偽筆のうまい人が一寸手巾に、これ等の諸家の書画を模写でき、人をごまかしおおせれば、賄物をほん物として売れる。彼自身も勿論それができる。下等の品は金もなければ、書画もないが、どうにか斯うにか数十銭に売れると、元値と同額の利益があがるし、拾てたものではない。日をえらんで箱に詰めて北京に来た。ところが、北京はその年の夏は

毎日霖雨が降り続き、少しも晴くないので、売れゆきが甚だ悪い。[9] 秋になって早くも涼しく遅ればせながら、幸に晴天になったので、おしゃれの若者が蘇州の扇子を買い求め、袖でつつんで、揚々として[10]歩きたがる。ところが買いに来たので箱をあけて見ると、しまったあ、[11] 元来北京は湿潤の地で七八月が梅雨どきで、更に過日の長雨の湿気のために扇面の膠や墨が溶けて、ぴったりとくっついて離れなくなってしまって、ひろげることができない。[12] 力まかせでひきあけると、こちらがくっついたり、あちらがはがれたりして、書画入りの高級品が全く役に立たない。唯、下等な無地の白扇だけが壊れないで残った。これが、どれ程の値段になろう。我慢して売り捌いた。[13] 帰りの旅費はつくったが、資本はすっかり無くなった。毎年やることは大体このようである。自己の資本をするばかりでなく、仲間までが破産してしまった。[14] このため、彼は人から「不運な男」という綽名をもらった。数年もたたないうちに、財産はきれいさっぱりすっからかんになった。まだ妻は娶らない。一日中あちこちと融通したり、世話になりして何の役にも立たない。[15] ただ口先が上手で、よくしゃべり、よく人を笑わせるので、友人達は皆喜んで私を歓迎してくれた。[16] 遊びに行く所では欠くことのできない人物であった。或日のこと、海外で商売をやっている近所の人、頭株は張大・李二・趙甲・銭乙の仲間で総勢四十余人組合をつくって、これから出発しょうというところであった。彼はそれを知って、独りで思案して「すっかり落ちぶれて、収入皆無、彼等の航海について海外の様子を見てくるのも人間一生にとって無駄ではない。[17] それに彼等はきっと断わるはずはない。家にいて米や薪の心配をしないですむし、愉快な話じゃないか」と考えていると、折よく張大が歩いてやって来た。[18] 元来この張大は名は喚、張乗運という呼び名で海外の商売を専門にして珍宝貴品に対する鋭い識別眼の持主である。その上、生れつき義侠心があり、善人を扶け、そのため郷里では彼を張識貨（目きき）という綽名をつけた。[19] 文若虚はこの人を見ると、心のうちを一部始終うち明けた。すると張大が言うに、「よろしい、わし等は船に乗っていると寂寞に堪えられない。君がいると、船中は話したり、笑ったりして、何のつらいことなどあろう、わし等兄弟たちも皆、喜ぶことだろうよ。ただわし等は皆商品を持っているのに、君は何も持たない。往復が無駄な気がしてもったいない。わし等、皆相談した上、多少かき集めて君を助けるから、君もいくらか品物を買ってくるがいい」「御厚情にたえない、唯、ほかの人もあなたのように私の面倒をみてくれるかしら」張大は「兎に角話してみよう」[20] と言って、そのまま去った。「ちょうど、そこへ盲目の占師が報君知（売占者が街上を歩きつつ歩く時は、又は小廝、盲人は多く後者を用う。）を敲きながら通りかかった。文若虚は頭袋（腰に下げて銀など入れる袋）の中から銭一個を取り出して占師を

ひきとめて財運を占ってもらった。すると占師が「この卦は非凡なものだ、何十分何百分の財気で並大抵のことではない」[21]文若虚は、つらつら考えた。「わしは海外に連れてもらって日を過せばよい。[22]どうしてわしは面売ができようか。彼等が助けてくれてもしれている。こんな金儲けの卦[23]があらわれるとは、この先生（占師）もろくでもない奴だ」そこへ張大がぶりぶり言いながら帰って来た。「『銭の話が縁の切れ目』というが、あいつ等笑わせやがる。君が行くと言った時に喜んだのに、援助の話になると一人も声なしである。ところが、私と二人の厚意的なのがいて、私と二人とので一両の銀子になったが、何んの品物をも仕入えまいから、君の勝手に品物を買って船中で食べなさい。主食の類はわし等の方でみてあげるよ」[24]若虚はお礼の言いようもなくその銀子を受取った。張大はひと足先に出かけて「早く仕度をしなさい、船はもうすぐ出発するから」[25]「わしは何んの支度もありません。あとからすぐ行きます」銀子を受取ると眺めて笑いながら、「何を買うか」足にまかせて歩いて行くと、街中、籠に盛られて売っている物は

紅きこと噴火の如く、巨なること惡星の如し、皮未だ鏤きれざるうちは、尚余酸あり、霜未だ降らざるうちは多くは得べからず。

もと蘇井諸家の樹と殊なり、亦李氏[26]の千頭奴[27]にもあらず。広（広東省）に較べては「兄たり難し」と曰うに似たり、福（福建省）に比ぶるも亦「体を具う」という。

太湖（蘇州の南西にひろがる湖）の中にある東西二つの洞庭山は地肥え閩（福建）広と変わらず、広東蜜柑・福建蜜柑の名は天下にひろがり、洞庭の蜜柑は色や香り全く同様で出初めの頃はその味すこし酸っぱいが、後、熟してくるとおいしくなる。福建の蜜柑の価に比べると十分の一、「洞庭紅」と名づけている。若虚はそれを見て考えた。「この一両で百斤買ってもおつりがある。船で喉かわきを癒すこともできるし、一つ二つ分けてやれば、私を助けてくれたお礼にもなる」竹籠に詰めたのを買い求め人を備って行李と共に船に担ぎ込ませた。皆手をうって笑いながら「文先生の宝物が来たぞ」文若虚は恥ずかしくて身の置き処もない位だが、声を呑んで乗船し、まだ蜜柑を買って来たことを決して言い出さなかった。船は出帆し次第に海へと乗り出した。銀の波は雪と舞い上がり、雪の浪は銀とひるがえる。急流が転ずると、日月も浮かぶかと思われ、波浪が躍れば天の川もくつがえるかと見えた。十五日間、風のまにまに漂って、どれ程の海路を進んだかわからない。やがてある土地に着いた。船から眺めると人家が密集し、城郭巍峩として聳え、どこの国に来たかわからない。船員は船をば風波を避ける小港へ漕ぎ入れ、杭[28]を打込み、錨を下ろし、纜をうまく、くくりつけた。その場所は吉零国というところである。元来この辺りは中国の貨物をこの吉零国に持って来ると

三倍の価になるし、この国の品物を中国に持ち帰えるとまた同じで、一往復すると、ただ八九倍の利益になった。そのため人は皆死を賭[29]してこの路を歩むのである。皆貿易をなし、それぞれよく識った仲[30]買人や宿屋・通訳人などを持っていたので、めいめい上陸して商品[31]を提供する人を求めた。文若虚ひとり船に居残って船番をさせた。路はふなれだし、行く先もない。退屈していた折、突然思い出したのは、「あの籠の紅い蜜柑は乗船してから一度も開けてみないが、人のいきれで蒸爛してしまったじゃなかろうか、皆がいないのに乗じて、みることにしょう。船員を呼んで船底をめくってもらい、籠をあけて見た時、皆いい色艶をしているのだが、安心が出来ない。いっそ運びだして皆甲板の上に並べた。やはりこれも出世する機縁福運の向いてきたのであろう。船一杯に並べられて、まっかに燃えたつものは、遠方から眺めると無数の光りがあり、満天の星である。岸上の人たちがそれを望見すると皆歩いて寄って来た。「これは何だね」文若虚は返事もせずに中にしみのあるのを選んできて両手で左右に割ってたべた。岸の見物人は益々ふえて来た。驚きながらも笑って、「おや、食べられるのかね」中に物ずきな者がいて、「一個いくらかね」と値段を聞きに来た。文若虚は彼等の言葉は分らなかったが、船員たちは知っていて一つ嘘をついてだましてやろうと一本の指を立てた。一つ銀子一匁と言った。かの尋ねた人は長衣をまくり兜羅綿（一種の綿織物羅綿は梵語の綿の意）の紅い腹巻をむき出しにすると、片手に銀貨一枚をつかみ出して「一つ買ってためそう」文若虚は銀貨を受け取ると、手で重さを量って見て相当の重さのを「この銀貨でいくら買うというのだろう、量ってもみないが、先づ一つをわたして様子を見よう。一番大きい赤い恰好のよいのを一つ選んで渡した。するとその人は受取って戸に載せて重みを量かりながら「すばらしいなあ」と言って、ポカンと音をたてて両手で割った。香りが鼻をつき、そばにいた大勢の人達の拍手喝采が聞えてきた。かの買った人はどうしてよいかわからない。先の船の上の食べ方をみてまねて皮をむいたが、一襲ずつに分けないで一塊、口の中へ入れた。ところが甘い汁が喉一杯に塞がり、種まで全く吐かず呑み込んでしまった。はらはらと大きく笑って「こりあ、すばらしい」またも手を腹巻きに伸して銀貨十枚取出して、「十個ほど主人に差し上げたいんだが」文若虚は望外の喜びで十個選んでわたした。見ていた人々もその人が買ったので、私も一つ、私も二つ三つと買い求めた。皆同じ銀貨である。買った人達は皆大変な喜びようで帰った。もともと此の国は銀が通貨である。

表に模様がはいっていて、龍や鳳凰の模様のあるのが最も貴重なものである。その次は人物、次は禽獣、さら次には樹木、最低の通貨は水草模様である。すべて銀で鋳造されていて重量は変らない。

[39]いまし方、柑橘を買った人達も皆同じ水草模様である。彼等は下等の銭でよい品物を買ったので喜ぶのも道理、小利を得たという気分、これは中国人と同様である。一寸の間に三分の二を売った。中には金を持っていないのがあり、非常にくやしがり、急いで銭を家から取ってきたものもあった。文若虚はもはや残り少ないのを見て掛引[40]して「もう自分の食べるのに、残しておくから売らないよ」するとその人はもう一銭高く買うからとせがんで四銭で二つ買った。口の中でつぶやいた。「不運にも来るのが遅かった」そばの人達は値が上がるのを見て、うらめしそうに、「わし等だって買いたい。どうして値段を高くさせたのか」買った人は「お前も聞いただろう。いまし方もうどんなことがあっても売らないと言ったよ」そんなことを言いあっているうちに、先に十個買ったかの人が黒斑毛の馬に乗って飛ぶようにして船の辺りに奔って来た。馬から下りて人の群をかき分けて船に向って大声で怒鳴った。「おい、売り惜しみするな、わし等は皆欲しいんだ、うちの親方が買って王様に献上したいんだ」見ている人達は此の話を聞くと、遠くにひきさがり、立ち止って眺めた。文若虚は利口な人だったから、その形勢を見て早くも目にとめて、これはよいお客であると悟った。急いで籠の中のものを傾けてみると、ただ五十個あまりしか残っていない。数をかぞえてから掛引して、「先に言ったように、自分用に残したいので売るわけにはいかない。今少し高く買っていただけるなら、いくつかお分けいたしましょう。先程一つ二銭でお願いしたところです。その人は馬の背中につけた大きな袋を曳き下して銭を取り出した。これは前とちがって樹木模様のものであった。[41]こんな銭一個ならよかろうと文若虚がそう言うと、「いけません、前と同じものでなくては」かの人はまた笑って一の龍鳳模様を取り出して、「これ一枚ではどうだ」「駄目です、前と同じものでなくては」その男はまた笑って、「[42]この銭一枚で水草模様の銭百枚に当るんだ、お前さんに与えるわけにはいかん、お前さん[43]に郷かったばかりだ、これがいらなくて、前のものが欲しいとは馬鹿だなあ、お前さんその品を全部くれるなら、おれは更に一枚ふやしてもかまわないが」文若虚は数えてみると五十二個あったので、きっかり百五十六枚の水草銀貨をその男から貰った。その男は竹籠さえ求めた。更に一枚の銀貨を投げ出して籠を馬の背に掛けてカラカラと笑いながら一鞭くれて帰って行った。見物人は売るものがないのを見て[44]一斉に散じた。文若虚は人のいないのを見て船室に下り、一枚の銀貨を秤にかけてみると一枚は八銭七分あまりの重さである。数回秤ってみるとどれも同じで総数を数えてみると凡そ千個位はあった。二枚を船員に与えた。その残りを包に収めて一声笑って「あの盲の占師の卦はすばらしい」喜びは次ぎ次ぎとこみ上げてくる。それはさておき、皆仲買

人をたずねて話をまとめ、品物を発送するために船にもどってきた。文若虚は一通り以上の事を話すと皆驚喜しながら「しあわせなことだ、しあわせなことだ。わし達は一緒に来ながら、逆に資本を持たぬお前さんに先手を取られたね」張大は大いに手を叩いて「人は皆、この人を倒運(運なしと言ったが、今はどうやら運が向いて来た」そして文若虚に向って、「お前さん、この銀貨で此の地の品物を購入してもたいした額にならない。是非とも仲間たちの持っている何百両かの中国貨物を譲ってもらい、その品をこの土地の珍しいものと交換して帰れば、大変な利益になるよ。この銀貨をてもとに空しくしまっておけば何の役にも立てないよりは優っている」文若虚の言うには、「わたしは運のない男で、元手で財をもうけようと思っても一度に元手すら失わずにはおかない。今皆さん方に引立てられて元手なしの商売をやり、偶然にも僥倖一番、まことに無上の幸福です。どうしてまた利を妄りに望もうか、万一また以前のように元手をすったりしたら、よもや二度と「洞庭紅」のような取引きはできようか」すると皆が「わたし達が得たいのは銀貨とたくさんの品物である。かれこれ融通しあえば、誰も得をするんだから、どうして悪いことがあろうか。文若虚は「一年蛇に咬まれると三年間、藁縄を見ても恐しく思うと言います。品物と言われただけで、わたしはすっかり勇気が無くなります。この銀貨を守って帰ろうよ」皆手を打って「幾倍にもなるもうけとおっぱり出して取らないのは残念である」皆と一緒に上陸して商家へ行って、はっきりと品物をわたし、互に交換した。半月ばかりの間、文若虚はあれやこれやのすばらしい物を見たが、彼はすでに充分満足しきっていたので、心には何物も留めていない。皆も用件が終ってから、一斉に乗船し、神の幸福と庇護とを祈る為に銀貨の型を紙で造ったものを焼いて酒を飲んで出帆した。数日航海したかと思うと突然天気が変ってきたのである。黒雲は太陽を蔽い、白浪は天まではねあがり、船員たちは風が起ったとみると、半ば帆を掲げ方向などはかまわずに、風のまにまに船を漂よわせていた。するとぼんやりと、島が見えてきたので、船あしを落して、島の辺りをさして船を進めた。次第次第に近づいてみると、どうやら無人島らしい。船員たちは船の綱をうまく繋ぎ止めて、風勢の弱るのを待つことにした。文若虚は手もとに銀貨を持っているので、心中是非とも羽があれば家まで飛んで帰りたいところである。何んとかして先へ進みたいのに、こうして待ってぼんやり坐っていたので、心は焦躁にかられて皆に向って「わたしは先づ上陸して島の様子を見てきます」と言うと、皆が「こんなに荒れた島に何の見るものがあろうか」文若虚は「どうも閑暇であるのだから何の妨げがあろうか」皆は風に翻弄されて頭がぐらぐらし、だれもかれも一日中欠伸ばかりしていて、一緒に行か

うという者などいないとみると、文若虚はそこでただ一人元気をふるい起して岸へ眺び上がった。藤蔓にとりつき、蔦かずらにつかまりながらまっしぐらに島の頂上に上りついた。島はそれほど高くはない。それ程たいした苦労もせずにすんだが、ただ雑草が蔓延してよき路径はなかった。頂上に辿り着いて見渡した時、四方は漫々として果しなく、わが身は一枚の木の葉のようで思わず悽然として悲しくなって涙が落ちてきた。心の中で「自分はこのように聰明であるのに一生好運が開かれない。家業を塊滅した挙句、たった身一つで海外までやってきた。饒倖にも千枚ばかりの銀貨を手に入れはしたが、これが自分のものになるのか、ならないのか、わからないが、今は絶海の孤島の中にあって、郷土にも帰れず、命さえもまた海の龍神さんにまかしてあるんだもの」ちょうど痛み悲んでいた時、ふと見ると、遠くの草叢の中に何か高く突き出たものがあった。近づいてみると、それは寝台位のこわれた亀の甲羅であった。これに驚いて「おや、世の中にこんな大きな亀があろうとは、世間の人は何処でも、こんなものを見たことはあるまい。話しても信んじてくれまい。わしもこうして海外に出かけてきたものの、海外の品物を一つも買っていないので、ひとつ、こいつを持って帰えろう。滅多にない珍しい品物だから、人に見せれば、無駄口をたたいて、滋州人は嘘をつくのが上手だと思われることがなくてすむ。それにまた鋸で切り放して、四本の脚をつければ、二つの寝台となるとは、奇妙ではないか」そこで両足の殷引の下部をつつむ脚絆をといでつないで一木の紐にして甲羅の中央にとおして結び目をこしらえて、それを曳きながら歩いた。船のそばまでくると、船員たちは彼のこのような有様を見て皆笑った。「文さんがまた何処からか船の引綱で曳いて来たぞ」すると文若虚は「皆さんに申上げます。これこそわたしの海外の品です」皆が頭をあげてみると、それは柱がなくて底だけある丈夫な箱形の寝台なので、びっくりして「なんと大きい亀の甲羅だな、おまえは曳いてきて何をするつもりなのか」「珍しいから、もってかえるつもりです」「よい品を一つも買わないで、これは何の役に立つんだね」中の一人が「いや役に立つよ、何か疑心があった時、これを焼いて卦を立てるんだ、こんな大きい亀の甲羅はなににもならない」又他の人が「いや医者は亀の膏を煎じるもんだよ。これを持って帰って粉々にし、それを煎じれば、小さい亀の甲羅の何百個にも当たるよ」「役に立つとか立たないとかは、かまわんが、兎角珍しいものだし、その上、元手がいらないのだから、持って帰るまでです」文若虚はそう言うと、船員に手を貸してもらって船室へと担ぎ下した。初、山の麓の広々としたところではそれ程にも思わなかったものが、船室で見ると益々大きく感じた。海船でなければ、このような巨大な品物は得られない。皆、し

ばらく笑っていたが「家に帰って人に聞かれたら、文さんは大きい烏龟商売(自分の妻に淫をひさがせること)をしてきたって話してやろうよ」「冗談を言ってはいけません。どんなものでも使いみちはあるもので爽てたものではありません」皆から笑われながらも、文若虚はなかなか得意、水を持ってきて内も外も綺麗に洗い拭うてから、自分の銭包みや荷物をすっかり甲羅の内側に詰めこみ、両端を紐でくくると大きな皮箱となった。自分から「これこの通り早速役立つではないか」と笑うと、皆も笑い出して「成程、うまい考だ、文さんもやはり聡明な人である」その夜は別に話もない。翌日は風も止んだので、愈々出帆、数日と経たないうちに、ある土地に到着したが、それは福建地方であった。船を止めたかと思うと、一団の海外商人を斡旋している仲買人たち[59]が集り寄ってくる、やれ張さんがいい、李さんがいい、としきりと引っ張り合って、大変な騒々しさ、船上の人人も前から知っているのを見つけてついていき、[60]ほかの者はそのまま船に残った。皆はある波斯人の大きな店へいって落ち着いたが、奥の主人は海人商人がやって来たと知ると、急いで料理屋をよび、酒を幾十卓(テーブル)かを都合させて、ちゃんと言い付けた上で落着いてゆったり出てきた。皆と顔を合わすと互に資主の礼をかわして腰を下ろしたが、お茶がすむと、立ち上って一同を大広間へ案内した。そこには酒宴の準備が整い、整然と按配してあった。もとからの習慣で貿易船が着くと主人はまずこのような歓待の席を設けて散財し、それから価格の交渉をしてから貨物を提供するのである。主人は七宝菊花[61]模様の大盃を手にとって拱手の礼をした。「では、皆様、品物の目録を拝見した上できちんと座席に着いていただきましょう」もともと波斯人は利益を重んずるので、[62]品物の目録に奇貨珍宝があり、それが万にのぼる値打の物だと見ればすぐその人を首席に据える。あとのものは品物の値うちに応じて順次に着席するのは、これまでの長い間の習慣である。船の皆も品物の高下、多少についてはお互にわかっているので銘々心の中に見はからい、多少の盃を受け終った頃、それぞれ坐がきまる。唯、文若虚一人だけポカンと立っている。[63]「こちら様はまだお会いしたことがありませんが、きっと初めて海外へお出かけになったので、あまり品物をお求めにならなかったのでしょう」と主人がそう言うと、皆は「こちらはわし達の親友で海外に遊びにきたのです。お金は持参しているが、品物を買うとしないのです。今日は仕方ないので末席に坐わらせましょう」文若虚は満面まっ赤にして恥じて末席に坐った。主人は横手に坐った。酒を飲んでいる最中、一人が、おれは猫眼石[64]をこれだけ持ってるぞと言えば、あちらが祖母緑(孔雀石)をこんなに持っているぞと言うて互に[65]自慢し合う。文若虚は全く黙りこんだが、流石に心中かすかな後悔の気持はあった。「いつぞや、皆の勧めに従って何か品物を買って

おけばよかった今嚢の中には何百両という銀貨がありながら、ひとことも口がきけないなんて…」それからまた自ら溜息をついて「自分は元来、少しの元手も無ったが、今はもう幸福なんだから満足しなくてはならない」あれやこれやと考えると、無心に酒を飲むことはできない、皆は猜拳（拳を打つ、指拳と同じ）をやったり、行令（[69]負に負けたもの）に酒を飲ますこと）をやったりして大騒きをしている。主人は世馴れているだけに文若虚の面白くなさそうな気持をくみとったが、それに触れようとはせず、酒を知らん顔ですすめた。やがて皆が腰を上げて「随分御馳走になった。もう遅いので早いうちに船に帰ろう、明日品物を出します」主人は翌日、朝早く起きると、第一に海岸の船まで行って、お客たちに挨拶した。主人が船に乗って一目見渡すと、彼の船室にあるあの物凄い品物が、真先に眼に入り、吃驚して言った。「これは誰の宝物なのか、昨日の席で少しもお話に出なかったのだが、お売りにならないものすか」皆は笑いながら「これは友達の文さんの宝物ですよ」主人は文若虚の方をちらりと見て、満面かっと赤くなり、怒りの色を帯び怨をこめて「皆さんとはもう長年のおつきあいなのに、どうしてわたしを[68]揶揄いなさるのか、新しいお客を末席に坐らせるような失礼な申訳のないようなことをさせるのか」と言うて、文若虚をつかまえ、皆に向って「出荷するのをさしひかえてくれ、わたしが上陸してお詫びをするまで」皆はわけがわからない。文若虚といくらか親しい者たちや、物好きな者たちが何だか変に思って総勢十人あまりついて上陸し再び店へ行って様子を見た。すると主人は文若虚を連れて、交倚（三方に袖掛りのある立派な椅子）を整え、皆にはお構いなく、彼を第一等の席に坐らせた。「先程は失礼申しわけありません。どうぞお掛け下さい」文若虚は「何が何んだかわからない、こんなものが宝貝とは思えない。こんな仕合がある筈がない」と考えている。主人は奥へ入ったが、暫くして出てきた。皆に会釈して先に酒を飲んだ場所へ案内した。そこには早くも幾席かに御馳走がならべられていた。第一テーブルは前と比べてもっと立派である。盃を取って文若虚に一揖すると、皆に向って「この方こそ第一席に掛けていただかなくてはならぬ方です。あなたがたが船全部の品物を徒らに出すよりこの方に及びません。今までは大変失礼しました」皆はこの有様を見て面白くもあり、訝しくもあり、半信半疑で一列に居並んでいた。酒が三廻りしたところ主人は口を開いた。「お尋ねしますが、この宝お売りになるのでしょうか」文若虚は抜目の無い男なのですかさず答えた。「よい値段であれば、そりゃ売りますよ」主人は売ると聞いて覚えず喜びが天より降ってきたような気持、顔を綻ばせて立ち上がると、「確かに売ってくだる、値段はおっしゃる通り決してけちはしません」文若虚は実は値段はわからない、安く言えば素人と思われそうだし、高く言えば笑われるかもしれな

い。色々と考えているうちに耳を真赤にして心が乱れて値段を出すことができない。そこで張大は文若虚に一寸目くばせをし、手を倚子の後にやって指三本突っ立て第二本の指（人さし指）で空中に「八」[75]字形を画いた。（これは千の字の第一刻の意）「寧ろこれだけと言ってみなよ」文若虚は頭を横に振り指一本を立て「これだけでも此の通り口に出して要求しかねているんだよ」それを主人に見られて「一体いくらでしょうか」張大は出鱈目を言った。「文さんの手真似では一万は欲しいようですよ」すると、主人はカラカラと笑って「これは売りたくないので私を騙まそうとしておられるのでしょうね。これ程の宝物がどうしてこれ程の値段ですまうか」皆は言れて目を見張り口をあけてぼんやりしながら皆立ち上った。文若虚を引っぱって行って相談した。「しめた、しめた、凄い値段だよ。わし達にはほんとうに値段がわからんから、文さん、大きくふきかけて、いくらでも彼に値切らせなさい」文若虚は言い出しにくく、もじもじして、言い出そうとして又止めた。皆が「いい子にならんでよいのだ」と言うと、主人は又促して「ほんとのことを言って下さい、かまいませんから」文若虚は五万両と言った。すると主人はまた首を振って「それはあんまりです。そんな話はありません」張大をひき寄せて、そうっと問うた。「あなた方はなんども海外に出かけられておられるし、あなたは人が皆、張識貨（張さんのめきき）と呼ばれている方です。どうしてこの品物の内情を知らないはずがありましょうか、きっと売る気が無いので、私をひやかしているだけなんでしょうか」張大は「実のところこの人は私の親友でただ遊びに海外へ同行したわけですから、品物を買っておりません。迺此の品物は風を避けている間、偶然手に入れたものでお金を出して求めたものではありません、だから値段はわかりません。若し五万両を彼に与えられれば、あの人は一生裕福に暮らせるし、それで満足するでしょう」「そうでしたか、それではあなたが彼の保証人となって下さい。うんとお礼を出しましょう。万一気がかわってはいけないから」と主人はそう言ってから、人を呼んで筆記用具を出させた。綿料紙（棉を原料として造った紙）を折って筆を張大に渡して、「あなたを煩わして世話役となって契約書を認め、きちんと取引きをまとめて下さるように」張大は同行の一人を指して「この楮中頌は字がとても上手です。紙と筆とを彼に渡した。楮さんは墨を濃く磨って紙をひろげ筆を取り上げて、「契約議定書を認める。張乗運等。ここ蘇州の客人文実・海外より大亀の甲羅を持参して波斯人珊宝哈の店に至り銀五万両を出して売買の成立することを願う、契約成立の後は一方で貨物を引渡し、一方では銀子を引渡し、各々翻意あれば罰として此の契約書と同一の即ち五万両の罰を加える。ここに契約書を作りて証となす」同じもの二通、後に年月日をしるし、その下に張乗運を筆頭に居合わせた

客十人分ばかりの名前を書きつらねた。褚中穎は自分が筆を執って書いたものから末尾に署名してある。年月日の前の空いているところで二枚を合わせ、そこに一行、割書[84]（騎縫（合せ目の両側に跨がせて書く）に両方へ半分ずつ跨がるように「合同議約」の四字を書いた。その下に客人文実と主人瑪宝哈の名を認め、それぞれ書判をした。証書に名をつらねた者は筆頭から書判をする。張乗運は書きながら「わたし達の署名料は高いですよ」これではじめてこの取引は成立する[85]。「うんとはずみますよ」主人は奥へ入り、先づ銀一箱を担ぎ出してきて「先に手数料[86]をきちんとお渡して、それから話をしよう」皆が集って来た。主人が箱をあけると、五十両一包みのものが全部で二十包み、きっちり一千両である。それを両手で張乗運に渡しながら「あなたがお受け取ってから、皆さんに分けて下さい」皆は最初酒にありついたような思いで契約書を書き、皆は唯[87]がやがやと騒々しいものの心の底には何かまだ信じられない気持があったのだが、今手数料としてきらきら光る白銀を持ち出されたのを見て、はじめて本当だとわかった。文若虚はまるで夢を見ているような、酒に酔っぱらっているような気持で全く何もいうことができず、唯ポカンとして眺めている。

張大が引っぱって「この手数料、どう分けよう、文さん考えて下さいよ」文若虚はやっとひとこと言った。「用件が済んだのだから、ゆっくりやろう」一人がにこにこしながら文若虚に向って言うには、「ひとつあなたと御相談したいことがあります、銀貨は今、奥の物置においております。皆、今までに[88]受けた銀はすこしも欠けていません、どなたか一人二人奥へ入って一包[89]みだけ目を通して受取って確めて下されば、あとは量るまでもない。この銀はかなりの数量だから運ぶのに一工夫なければいけません。まして文さんは一人でどうしても船に積み込めません。海路を帰えられるので多少不便なこともありましょう」文若虚は少し考えてから「仰せの通り、どもっともです。ではどうすればよいでしょうか[90]」「わたしの考では文さん今お帰りにならぬ方がよい。私、この地に呉服[91]店を持っていますそこの元手が三千両、その前後には大小の建物家屋が皆で百間余、これもたいしたもので二千両の値うちがあり、ここから半里のところにあります。わたしの考では店の品物と家屋[92]の証文とを合せて五千両とし、これを全部文さんに渡しますから、文さんはここにお住みになって商売をなさったらと思います。銀貨の方は幾度にも分けてお運びになれば、知らず識らずのうちにかたづきます。後日お国へ帰りたい時、ここは腹心の店員に管理を託して身軽に往来できます。そうでなければ、私の方ではお渡しすることは容易ですが、受取りが大変です。私の考はこの通りです」文若虚は「私はもと家族はありませんし、その上、身代もすりつぶしてしまった。よしや沢[93]

山の銀を持って帰ったところで置く場所もない。この人の言う通りに此処で家を持っても何の差しつかえがあろうか。この度の幸福も縁というもので、総べて天のなせるものによるのである。何事も縁によってしさえすればよい。[94]誓い品物や家屋の値段が必ずしも五千両にならなくとも、総べて元手なしで得た物である[95]」そこで主人に向って言った「いまし方のお言葉は万全の策と思います。仰せの通りにしないわけにはいきません」主人は物置を見に行った。張・褚との二人を同行させ「あとの方はそれには及びません、どうぞ坐っておいて下さい」四人で入って行った。あとの人々はそれぞれ首を伸ばしたり縮めたりして互に[96]なんのかんのと言っている。「こんな不思議なことってあるかいなあ、こんな幸福があると知ったら、船が島に着た時、なぜ出かけなかったのかとくやんだり、ひょっとしたらまだ宝貝があるかもしれないぞ[97]」あるものは「これは大変な福運だ。これに出遭ったものには、とてもかなわない」と羨しがっているところへ文若虚は張と褚と二人がもう出てきた。「どうだったね」と皆が尋ねると「奥の高い建物が貴重品の庫で銀貨のある所だ。皆桶に詰めてある。いまし方、見たのだが十個の大きな桶があり、桶ごとに四千両、それに小箱五個、桶毎に一千、皆で四万五千、既にちゃんと文さんの封印がしてあった。品物を渡しさえすれば、文さんのものである」そこへ主人が出てきて「家屋の証券や反物の帳簿すべてここにあるから合せて五万両になります。では品物を受取りに船へ参ります」そこで皆ひとかたまりとなって船へ出かけた。文若虚は歩きながら、皆に「船には船員達も多いから、決してこの話をせないように、お礼を充分しますから」と頼んだ。皆も船員達が知って手数料の分け前を要求されるのを恐れて各自心に納得[98]した。

文若虚は船に行くと先づ亀の甲羅から自分の包みや褒を取り出し、甲羅を撫でながら、呟いた「しめ、しめ」主人は店の若者二人を呼んで甲羅を担がせ「うまく店へ運び込んで、外に置いてはいけないよ」と言いいつけた。船員たちは甲羅を担がれて行くのを見て「この厄介物を手放した、いくらで売れたのだろうか[99]」文若虚は唯沈黙していた。片手に包を持ち岸に上っていく。初め同じく上陸した人人も後を追って上陸し、亀の甲羅の頭から尾までしげしげと眺めたうえ、今度は甲羅の中を覗き込んだり、撫でたりしながら、互に顔を見合わせて「どこがよいのだろうか」主人は十人ばかりを連れて店に着くと「さあこれから文さんと一緒に建物や店を見てきましょう」皆が主人と一緒にやってきたところ繁華な町の中程にある非常に大きな建物であった。表の正面が店でその傍に十字路があり、そこを曲ると二扉の大きな石の門がある。門の中は中庭で、前面は大広間、広間には「来琛堂」と書かれた横額がかかっている。広間には側室(母家の前の両側になる家)があって部屋の三方に戸棚が

あり、戸棚の中には総べて綾絹や薄絹の色々の繻子の反物である。その奥には住居や高楼がたくさんあった。文若虚は密かに「こんなところに住めば、王侯の家もこのようなものであろう、それに呉服店の商売があるんだから、利益も無限、譬え、この地の商人[100]になったところで構やしない。郷里のことを思ったって何になろう」そこで主人に言った。「結構は結構なんだが、唯わたしは独り者、いづれ数名[101]の召使を何人か探さなくちゃ住めません」「こんなことはなんでもありませんよ、総べて私共におまかせ下さい」文若虚はすっかり大喜びで皆と共に本店に帰った。「文さん、今晩は船に行かないでお店でおやすみ下さい。使用人は今店にいるので間に合せ、段々要[102]めればよいでしょう」すると皆が言った。「最早取引は済んだ。別にもう何も言わない。唯、私達には、駄か合点のいかないことがあります。この甲羅[103]はどこがよくてそんな値段になるのですか。どうか、御主人、はっきりと話して頂きたい」文若虚も「それなんですそれなんです」主人は笑いながら「皆さんは長年無駄に海をお渡りになっていたとみえてこんなことがおわかりにならず皆さんもお聞きでないでしょうか。龍には九つの子があります。子のうちに鼈龍というのがあります。自由にその皮で太鼓を作るが、音が百里の遠くまで聞えるのでこれを鼈鼓といいます。鼈龍は万歳になると、遂に殻を脱ぎ捨てて龍となる。その殻には二[104]十四本の肋骨があって天上の二十四気に肋骨と肋骨との間に大きな珠がある。肋骨が未完全の時は龍にもなれず殻も脱げず、又生捕りにして皮を太鼓に張る位で肋骨の間に何もありません。やがて二十四本の肋骨が完全になるのを待って、始めて節々に珠が生じたあかつきには、その殻を脱ぎ龍に変じて飛び去ります。だから天然自然に脱ぎ捨てたもので、その時がきて肋骨が完全に備ったものと、生捕りにした寿命の満たないものとでは同じでない。それ故こんな大きなのがあるのです。こんなものについては、はらの中では知っているが、何時殻を脱ぐのか、又何処で[105]じっと待ってそれを手に入れられるのかわからない。殻は値うちはないが、その珠は皆、夜光で価の知れない宝物である。今日は幸運にも入手できて思い残すことはありません」皆は聞き終っても半信半疑である。主人は奥へ入ったが、暫くすると、にこにこ顔で現られ、袖の中から金布（西洋布）の包を取り出した。「どうか皆さん見て下さい」と言いながら包を開くと、一[106]塊の糸の中に包んである。一寸位の大きさの夜光の珠が一粒、眼を奪うばかりの色つやである。黒い漆ぬりの盆にのせて暗がりに置くとその珠はころころ[107]転がりながら、きらきらと輝き一尺ばかりを明るくした。皆は見ると喫驚して目はぱちくり、口をあけてあんぐり、舌を[108]伸したまま引込められない有様、主人は向き直って皆にお礼を言った。

「皆様に色色とお世話になりました。この一粒だけでも自国に持って帰れば、先程の値段に当ります。あとは総べてお恵みと言えましょう」これには皆も驚いたが、すんだ話だから、ひるがえすわけにはいかない。主人は珠を受取って、そこで皆と一緒に文若虚を呉服店まで送っていき、店の番頭や若者たちに紹介させた。「これから、この方が主人ですよ」そういうと主人は別を告げて「わたしの店へもお出かけ下さい」間もなく、数十人の人夫が肩に担いで先程の文若虚が封印した十個の桶と五個の小箱を総べて送り届けた。文若虚はこっそりと用心深く[109]寝室の中へ運び入れると、出てきて仲間の皆に「皆さんに連れ来て頂いたお蔭で意外な多額の富を持つことができて感謝に堪えない」そして奥へ入り自分の包の中から「洞庭紅」を売って得た銀貨を取り出してきて、各人に十個ずつやり、張大と先に銀子を出して助けてくれ二三人には別に銀子十個を贈って「いささかのお礼の印です」皆はさっぱりして、何んのお礼の言いようもない。文若虚はまた十個を出して張大に向って言うには「あなたの手を煩わしますが、一緒に来た船員達にこれを一個ずつ、せめてお茶代にでもと分けて下さい。わたしは此処に住い[110]落着いてから、ゆっくりと故郷へ帰ります。今御一緒することはできないので、これでお別れします」すると張大が「まだ一千両を分けていないが、どうしたもんだろう、文さんに分けてもらえば異議がありません[111]」「そうそう、忘れていた」文若虚はそこで皆と相談の上[112]百両を船にいる人人に分けてやり、あとの百両を今いる人数の外に二人分余計に加えてその数で割り、各自一口ずつ分けることにした。張大は筆頭であり、褚中顔は執筆者だったので[113]一口ずつ多くもらうことにした。皆はすっかり大喜びで、誰も異論がない、中に一人「あの回教徒だけ[114]利益を得させた。やっぱり文さんはここで苦情を持出すべきだ、不足を要求すべきである。すると文若虚は「足るを知らなくてはならない、私は倒運渓（芽の出ない男）で何かすれば元手をすっていたものが、幸福が到来して、わけなくひとかどの財の卦がありました。人生には天命があり、必ずしも無理に求めるべきでない。若しわたし達はこの主人の識別眼が無ったら、あの品は廃物にしてしまったことでしょう。やはり彼がはっきり教えてくれたお蔭です。どうして[116]良心に恥じて争うことができようか」「文さんの言う通りです。心根が真面目な人だから、こんな富貴を持ち得たのであります」皆に何度もお礼を言って、それぞれ貰った品物を持って船へ戻り品物を送り出した。これより文若虚は福建第一の豪商となり、そちらで妻を娶って家業を興した。

長年の間、僅かに一度蘇州に帰り、昔なじみに会い、もとどおり去って行った。